

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第 29 号



2021年10月24日発行

発行責任者 芳川玲子

〒259-1292

平塚市北金目 4-1-1

東海大学文化社会学部心理・社会学科

「芳川玲子」研究室

巻頭言・新支部長挨拶

アメリカのスクール・サイコジストから思うこと

日本学校心理士会神奈川支部は、創立してから20数年がたっています。この時間は、自分が学校心理学を知った年月でもあります。学校心理学はどのような学問か、学校心理士とはどのような存在か、実際に理解したのは横浜国立大学で教員として勤務するようになった後、前支部長である岡田守弘先生とともに日本学校心理士認定運営機構主催の海外視察に参加した時からです。塩見邦雄先生（兵庫教育大学名誉教授）が視察団長で、ニューヨークとデラウェア州を中心としたコースでした。10日足らずの日程で、私たちはデラウェア大学で授業に参加し、大学の教員と交流会を行い、さらに、小中学校及び高校の視察も組み込まれていました。デラウェア大学ではBare教授という方がいて、アメリカのスクール・サイコジストについて詳しく紹介してくれました。Bare教授は非常に温かい方で、その後、個人的にデラウェア大学に出張する機会があった時もいろいろとお世話になりました。

さて、話を戻しますと、当時最も衝撃的だったのは、アメリカのスクール・サイコジストは日本と異なった働き方をしていた事でした。派遣型ですが、ほとんどのサイコジストは直接ケースを担当するのではなく、教員へのコンサルテーション活動をメインの仕事にしていました。また、臨床的・サイコジストと違って心理療法を重要視するのではなく、アセスメントを大切に、学校の子どもとその保護者、そして教員に対する専門的援助を行っていました。話と態度から、私はその方たちから学校教育を支援する専門スタッフとしての誇りを強く感じました。もう一つ新鮮に感じたのは、アメリカのスクール・サイコジストは自由で柔軟な発想で、子どもが必要と思われる支援を教員とともにつくっていました。教員と一緒に特別支援教育の教材を作り、いじめ防止プログラムを作成し、実施を企画したり、カンファレンス会議で子どもの心理教育的アセスメントを解釈し、それを遠足にどう生かすのか、スタッフと一緒に検討していました。さまざまな場面にスクール・サイコジストがいました。本当の意味での協働を見させていただきました。

昨年度から新型コロナが蔓延し、学校教育も大きく影響を受けました。学校心理士会神奈川支部も少しずつ変わりました。昨年度の10月は、学校がどのようにコロナ下で工夫してきたのかについて、会場とオンラインのハイブリッド方式でシンポジウムを開き、今年の2月は、ステイホームの中で気になるネット依存についての講演会を実施しました。今年になって、蔓延防止期間や緊急事態宣言期間が長く続き、不登校・いじめ・虐待・自殺問題も増大しています。思うに、支部会員の皆様も対応に悩みながら過ごしていると思います。このような中、神奈川支部はどのように会員の皆をサポートしたらいいのか、学校や子どもや保護者に役に立つ学校心理士はどのような資質が必要なのか、支部の今まで20数年の歴史とこれからの展開を考えました。無論、ここでいう資質とは先天的な意味合いではなく、私たちが生涯教育の中で身につけられるものとして考えています。

学校に関係する子ども、家庭、教員、地域を援助するために、学校心理士は文化・価値観・生命倫理についての幅広い知識を有する必要があると同時に、対人関係能力、学校や教育に関する知識、心理学に関する知識とスキルなどが重要だと考えます。それらが融合した結果、学校心理士は自由で柔軟性を持った多方面な援助ができるのです。神奈川支部はこれからも多方面な研修内容を考えながら、会員の皆様の役に立つ支部として取り組んで参りたいと思います。今後とも、よろしくお願いいたします。

(日本学校心理士会神奈川支部支部長・芳川玲子)

令和3年度神奈川支部総会 報告

1. 日時 令和3年6月20日(日) 14:00~14:30
2. 場所 ウィリング横浜 (zoomによる同時配信実施)
3. 総会の議事と審議結果
 - (1)開会
 - (2)支部長挨拶 岡田守弘
 - (3)議長選出
 - (4)議事
 - 第1号議案 2020年度事業報告並びに決算・監査報告・・・・・・・・承認
 - 第2号議案 2021年度事業計画案並びに予算案について・・・・・・・・承認
 - 第3号議案 役員改選について・・・・・・・・承認
 - その他
 - ① 『神奈川支部の20周年記念行事』について検討する。
 - ② 引き続き、電子媒体での情報発信を検討する。

- ・第56回研修会 2021年6月20日(日) ウィリング横浜 (Zoom同時配信)
講演: 「GIGAスクール構想」は、コロナで苦しむ子どもたちの救世主になるか
講師: 田村 順一先生 (元帝京大学教授)
- ・第57回研修会 2021年10月24日(日) ユニコムプラザさがみはら (Zoom同時配信)
講演: 子どものメンタルヘルスと保護者への関り方
講師: 高橋 雄一先生 (精神科医、横浜市東部地域療育センター所長)
- ・第58回研修会 2022年2月27日(日) ウィリング横浜
講演: 未定 講師: 未定

第56回研修会報告

日時 2021年6月20日(日)

場所 ウィリング横浜

(Zoomによる同時配信実施)

「GIGA スクール構想」は、コロナで苦しむ子どもたちの救世主になるか？

講師：神奈川支部副支部長、元帝京大学教授 田村順一先生

GIGA スクール構想とは、「1人1台端末と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子どもを含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現する」として、2019年12月に文部科学省が発表したプロジェクトである。当初は新学習指導要領に盛り込まれた「アクティブラーニング」や「プログラミング学習」への対応が期待され、5カ年計画で進められる予定だった。ところが、コロナ禍による一斉休校に対応するために、「学びを止めない」としてリモート授業のニーズが高まった。これを受け、各自治体が端末の導入を前倒しで一気に進め、活用が図られている。その一方、膨大な機器の管理やメンテナンス、数年後の機器更新、教員のスキルアップが課題として指摘されている。

コロナ禍によって、これまで当たり前だったことが当たり前でなくなり、日常が大きく変化した。コロナ禍がたとえ終息したとしても、今後もこのような非常事態は起こりうる。そのためにも、登校しなくても行える教育＝リモート教育を想定せざるを得なくなった。

1965年に文部省が示した「生徒指導の手引き」には、「学校教育は、教科指導と生活指導の二本柱で構成されている」とある。リモート教育で教科指導はできても、これまで学級活動や特別活動等をはじめ学校生活全体の中で行われてきた生活指導を保障することは難しい。教科指導も、教師が主導し効果的に教える「従来型の授業モデル」から、学ぶ主体は子どもで、教師はそれを支援する存在であるという「未来型の授業モデル」への転換が示されている。

急速なテクノロジー依存と価値観の変化により、30年後の未来を展望できない社会を生き抜くためには、自分を絶えず変革させていくことができる柔軟な姿勢や、一生学び続けられる力を子どもに身につけさせることが大切である。急速な価値観の変化に適応するためには、柔軟な思考と耐性＝レジリエンスが必要である。それは、「主体的・対話的で深い学び」に示される授業だけではなく、学校教育のもう一つの柱である「生活指導」で身につけるものではないか。

今後社会は Society5.0 に向かって、AI やロボットと共存する世界に進んでいくのだろうが、子どもを取り巻く状況はどうなのか。少子化や地域社会の機能低下で、豊富な人間関係に接する機会が減り、自然発生的な異年齢の子ども集団が形成されなくなった。直接的な人との関係作りが怖くなり、SNS に逃げ込んで自縄自縛となる子どもの問題も指摘されている。

コロナ禍で改めて確認されたのは、学校教育は学習面の保障のためだけにあるのではないということだ。GIGA スクール構想の進展により、教師の授業力が問われている。教え込むのではなく子どもたちに学ばせる力が重要で、塾とは違う魅力のある授業作りが求められている。そして、今一度「生活指導」の内容を見直し、機械では代替できないことをどれだけ用意できるか、豊かな人間関係を築ける子どもをどうやって育てるかが大きな課題である。GIGA スクール構想により、教師のレジリエンスも問われている。

「学校教育のあり方」が大きく転換しようとしている中で、学校心理士は何ができるのか。「生活指導」に関わる人間関係の構築や心の成長をどう促すかに、多様な援助者の一人として参画することだ。「学校教育は援助サービス」という学校心理学の基礎理念を、今こそ再確認する必要がある。

新役員体制（任期は令和3年度から3年間）

特別顧問：	岡田 守弘				
支部長：	芳川 玲子				
副支部長：	田村 順一	泉原 恭子			
事務局：	大草 正信	斎藤 一政	三藤 敏樹		
役員：	菴原 典子	石綿 一弘	伊藤 琢也	上杉 忠司	
	大里 朝彦	奥村 美由	尾崎 ゆみ子	春日 彰	
	蒲地 啓子	川村 智子	北村 耕一	小島 恵美子	
	佐藤 弘幸	鈴木 正一	竹本 弥生	服部 潤子	
	古屋 茂	古屋 美雪	三浦 千夏	和田 智司	
会計監査：	塩野 優子	渡田 典子			

本の紹介



「なんでもない日はとくべつな日 渡航移植が残したもの」

大谷邦郎・青山竜馬[編著]

国際移植者組織 トリオ・ジャパン[協力]

はる書房 2018年7月13日発行 定価1389円（税別）

2014年の7月、双子の姉の死をきっかけに「拡張型心筋症」が見つかり、助かる道は心臓移植しかないと通告された青山環ちゃん（当時2歳）。残された時間が少ない中、両親は海外での手術を目指しますが、その費用は実に3億2000万円。そこで、仲間を募って「救う会」を結成し、彼らからの献身的な活動により、僅か数か月でその巨額の費用を寄付で集めることができました。そして、渡米、手術、成功、リハビリ、退院、帰国…。まさに“奇跡の連続”でした。しかし、その一言では済まされない「現実」が、日本の医療には存在しているのです。果たして渡航移植が残したものは何だったのか？この本を通して、皆さんと一緒に考えることができれば幸いです。

【編集後記】6月の総会では、新役員体制が承認されました。芳川玲子支部長を筆頭に、5名の新役員とともに、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けている学校や子どもたちを支える活動を推進していきます。「特別顧問」となられた岡田守弘先生には、今後も神奈川支部の活動を広い視野で見守っていただき、時には厳しい示唆をいただきたいと思います。

ryoshi@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp（編集部）